

池澤夏樹

骨は珊瑚、眼は真珠

池澤夏樹

骨は珊瑚、眼は真珠

文藝春秋

骨は珊瑚、眼は真珠

一九九五年四月三十日 第一刷
一九九五年六月十日 第二刷

定価はカバーに表示してあります

著者 池澤夏樹

発行者 湯川豊

発行所 鐵文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―一三

印刷 大日本印刷
製本 大日製本

©Natsuki Ikezawa 1995, Printed in Japan
ISBN 4-16-315480-9

万一落丁・乱丁のある場合は、送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

目次

眠る女
7

*

アステロイド観測隊
45

*

パーティー
87

最後の一羽
97

贈り物
107

鮎
117

*

北への旅
141

骨は珊瑚、眼は真珠
165

眠る人々
197

装 画・大房真一
デザイン・坂田政則

骨は珊瑚、
眼は真珠

眠
る
女

いつもと変わらない普通の朝だった。七時に自然に目が覚め、三分後には暖かい寢床に未練もなく起きだして、暖房のスイッチを入れた。そのままキッチンに向かう。十二月の東海岸は相当に寒い。タイマーをセットしておけば起きる時に暖かくしておくこともできるのだが、彼女は寒い部屋へ起きていって、ガウンをまとった姿で暖房のスイッチを入れる方が好きだった。室内の空気は冷たいけれども、ガウンの中にはまだ寢床の暖気が身体にまつわりつくように残っている。それを惜しみながら、ゆっくりと動く。

コーヒーのための湯をたつぷり沸かす。大きな音で夫の眠りを少しでも浅くできないかと、キッチンから短い廊下を隔てて寝室へ至る二枚の扉を開けたまま、コーヒー豆を入れたミルのスイッチを指で押す。ミルは相当な音をたてるが、それが夫の覚醒を少しは促すのかどうか、よくわからない。それでも、眠っている耳にその騒音を注ぎ込むのは毎朝の快感なのだ。一度、寝室のコンセントにつないで耳元でやってみたことがあっ

た。夫はさすがに文句を言った。義務として強権を発動する快感、と彼女は夫に向かつて説明したが、それ以降は寝室でやるのはやめた。

家のあちこちにある空調装置の口から暖かい風が吹き出す音にやかんの湯がたぎる音が混じる。大きなマグ四杯分を収めるポットの上に挽いた豆をセットし、やかんの湯を少し高い位置からゆっくりと満遍なく豆の上に注ぐ。彼女の身体から寢床の暖かさが失せてゆく代わりに、暖房とレンジの熱気と動いていることによる暖かさが補われる。細いやかんの注ぎ口から少しずつ熱湯を豆の上に落としてゆく。芳香が立ち昇る。ミルの轟音よりもこの匂いの方が夫の目を覚ます効果があるかもしれない。聴覚よりも嗅覚。そういう性格、あるいは体質だろうか。

その後寝室に戻り、長いスカートとざっくりしたセーターに着替えた。夫を本格的に起こす。何度かの促しと脅迫とゆすぶりと軽い愛撫の交換の後、夫はふらふらとおぼつかない足取りでベッドから出て、朦朧とした表情のまま食卓の前に坐った。いつもと変わらない。寝起きのよい妻と極端に寝起きの悪い夫。コーヒーマグを目の前に置く。これは効果がある。一口すするごとに着実に一段ずつ目が覚める。それならば、嗅覚よりも味覚。そういう体質。

夫婦の間でなんども冗談半分に論じたテーマだ。そう思いながら、バターとマーマレ

ードと砂糖とクリームを並べたテーブルの上にトーストを運び、今朝はなかなかきれいな形にできたオムレツを運ぶ。夫の同僚の大半は朝は和食派らしい。しかし、場合によっては昼も夜も濃厚にして量も多いアメリカの食事になることが多いのに、彼女の夫は朝も洋風を好んだ。玉子はスクランブルと目玉焼きとオムレツのローテーション。それにハムかベーコンかソーセージという選択肢。付け合わせには缶詰のアスパラガスかザワークラウト。時にはクレソンとマッシュルームなどのサラダを作る。まだ半分眠っているくせに夫はよく食べる。作った方としては見ていて満足を覚える。

その一方、まるでホテルみたいとも彼女は思うのだ。もともと海外でホテル暮らしのような日々を送っているのに、それ以上にホテル風を求める。家に自分の匂いがつくのがいやで、借りたら借りたまままで暮らす。そういう人なんだ。結婚して八年もすると、お互い日常の欲求の多くを認め、受け入れるようになる。子供がいればまた違ったのだろう。家族が二人と三人では力関係はぜんぜん違う。彼女の精力の配分が違ってくる。忙しくなり、たぶん夫の言うことをもつと無視するようになる。その方が健全だろうか。しかし子供はいないのだ。

皿をトーストできれいに拭いている夫を見ながら、彼女は立ち上がった。

「お弁当、持っていくんでしょ？」

「ああ」

「夕食は？」

「戻るよ」

「何が食べたい？」

「朝飯食べている時に晩飯に何が食べたいかなんてわからないよ。腹が減らないと食べたいものは見えてこないだろ」

「そうね。そうかもしれない」

「後で何かひらめいたら電話する」

その声を聞き流しながら立って、弁当を作るためにキッチンに入った。大きな都会だから、日本食の素材は何でも手に入る。刺し身の残りのマグロを生姜で煮て、最後に大量のネギをほうりこむ。ホウレンソウはおひたしにしてけずり節をたっぷりかける。飯は間に海苔を挟み込んで、二段重ね。佃煮二、三品をあしらひ、赤いものがほしいと思つて明太子を一片添えた。別の小さな容器に皮を剥いたカキを入れてデザートにする。作りながら、弁当というのはいやばい子供っぽいものだと思う。

「きみは今日は？」とシャワーから出てきた夫がなにげなく聞いた。

「別に。掃除と洗濯ぐらいね」

「主婦の仕事か」と夫は言った。「聴講は？」

「明後日よ」

まったく普通の朝だった。

一人になって、まず朝食と弁当作りで使った食器や調理器具を洗い、ポットに残ったコーヒーをカップに注いで、夫が昨夜持って帰った日本の新聞をテーブルに広げた。紙面を視線が滑ってゆく。上滑りしている。目を留めるほどの記事は何一つなかった。このアパートメントの中にいるかぎり、日本での生活とさほど違うところはない。ケール・テレビのチャンネルの大半は英語だということ、新聞の配達がないこと、それに家が広々として天井も高いことぐらいだろうか。日本の友人に電話する時には時差のことを考えなければならない。

まずベッドを整えておこうと思い、寝室に向かった。彼女は寝具の間からそと抜け出すように起きるが、夫は布団も毛布もはねのける。これもいつものことだ。手を伸ばして毛布が枕に半分かかる位置に整えようとした時、ふらつとした。めまいではなく、頭の中にいきなり霧が湧き出したような感じで、その霧はみるみる濃くなって、しばらくそれに耐えているうちに、その霧が実は眠気であることに気づいた。私は眠ろうとし

ている。そんなはずはない、朝起きたばかりなのに、と思ひながら、眠氣にすっかり包まれる前に急いでスカートとセーターを脱いで下着姿になり、崩れるようにベッドの中へ入った。毛布の奥の方へ足を伸ばしながら、これはおかしいと思った。ただの眠氣ではない。まるで暴力的に眠りの中へ人を引きずり込むような力だ。そんなことが自分の身に起こるはずはない。そう思つて抵抗するものの、その強い力にはかなわなかった。そのまま、飛行機が離陸するように、速やかに眠りの空へ舞い上がった。

眠りの中では意識がないのに、自分がもうずいぶん長い間眠つているということがわかる。長い時間をかけてずっと遠方へ運ばれてゆく感じがつきまとう。すべてが終わつて元に戻るまで、目を覚ますことはできない。延々と飛んでゆく。空氣もない高い空を、透明なカプセルに入つた自分の心が飛んでゆく。そのことをはつきり自覚することはできない。なんと言つてもここは眠りの中なのだ。黙つて、おとなしく、目を閉じて、じつと運ばれる。高い高い空を飛んでゆく。

歩いている。何か紺くろのようなものを着て、髪は洗い髪、両手に盆を持つてゐる。同じような衣服を身につけた老婆と一緒に来てくれている。一人ではない。この人がちゃんと何でも教えてくれるという安心感がある。大事なことをするのに、一人ではない。私

は何も知らないけれど、みんながついている。盆の上に載っているのは何だろう。白い鉢巻きを折ったようなもの、それに香炉、その中に立てられた線香。それを運んでいる。道は狭く、脇には小さな白っぽい木の家が立ち並んでいる。よく知っているところだと思ふ。子供の頃からここで育った。そんなはずはないのに。知らない土地なのに。私はいったい誰だろう。

歩いている。洗い髪がゆれる。急ぐでもなく、老婆と二人、しつかりとした足取りで歩く。大事なものを運んでいる。やがて自分の家が見える。それが自分の家だということとがわかる。彼女と老婆は家に上がる。何人かの家族が待っている。みんな広い畳の間に正座して待っている。盆を捧げ持つてその中に入つてゆく。老婆が彼女から盆を受け取り、自分の前に置いた。立っていつて、この家の祭壇から香炉を持つてくると、彼女が運んできた香炉の横に置く。その中の灰をつまみ上げ、この家の香炉に移す。それを三回繰り返す。そして、自分の前にいる誰かに両の手のうちを見せるようにして、祈禱をはじめた。彼女は少しさがったところで同じように頭を下げている。家の者たちも同じように頭を下げている。私は誰なのだろう。

長い祈禱はようやく終わった。一つの儀式が終了した。

「これでウプティシジがこちらに来てくださいましたからね」と老婆はにこにこしながら